

エルンスト・ルドヴィヒ・カアル（二）

——重商主義と重農主義の過渡的論者——

赤 羽 豊 治 郎

目 次

- 四 自然的秩序における社会経済体系
- 五 自然的秩序とカアルの経済理論
- (イ) 経済の自然的秩序
- (ロ) カアルの経済理論
- (1) 分業 (2) 国民福祉 (3) 生産協同体
- (4) 価格 (5) 貨幣 (6) 信用
- (一より三まで、本誌十三号)

四 自然的秩序における社会経済体系

さてカアルの経済学体系であるが、かれ自身かつていかなる著者も「国民福祉の一切のテーマを取扱うに一つの統一的 방법をもって叙述することがなかった」とし、「わたくしが本書で新しいと思うすべては方法である」（第一巻

序文六頁)といい、方法論の確立を主張する。^①

およそ経済現象ほど見渡し得ない雑多であり、国民経済は経験対象としてのみ現われるにすぎず、そのままでは到てい国民福祉の知識は把握されない。それを可能ならしめるには個々の事実を「一つの秩序に齎らすことが要請される」ことになる。換言すれば所与の直接的経験のなかで思惟がこれを秩序的に把らえ、その統一的視点に従い雑多な経験的事事を比較分離し、認識対象として結合することが必要である。「わたくしは何らかの科学的部分で必然の一貫性から一を他に結びつけるため従わねばならぬ自然的秩序に^②基いて国民福祉のもろもろの規則を整序しなければならぬ」(同七頁)。

ここでは自然的秩序が後代のハインリッヒ・リッケルトの所与性の範疇の如き役割を演じる認識対象は自然的秩序の思考形式で把えられている。^③「思考的関連としての自然的秩序」は国民福祉の雑多な内容を一つの全体に齎らし、斯学独自の特徴を決定する形式的類同性をつくりあげ、個々の社会的経済関係を論理的に構成する。なかでも注目すべきは、とくに国民福祉の協力者の社会的関連が分業と交換において現われるという認識である(七頁)。それゆえ自然的秩序は経済的事実と関連をそれらの本質において考察する可能性を提供する。国民福祉の「単純かつ明瞭なるもろもろの原則」はかような論理的に整序された体系のなかで形成され、これらの原則を基礎として一切の所与は必然的一貫性のなかに結びつく」(七頁)。自然的秩序のなかで経済固有の法則が現われ、そのなかに経済の自立性がはっきりする。然らば自然的秩序における社会経済体系はいかに形成さるべきであらうか。

注

① フリードリッヒ・ホフマンは一九四三年のカアル論評において、かれの新方法（内容でない）は恐らくハレ大学のトマジウスの影響であろう、とみている。元来トマジウスはスコラ的方法に不満であり、ハレの聴講生をスコラ的学习から解放し、自然法の根本原則に依拠せる思考で教育せんとしたという。なお文中括弧内の頁数はカアルの原書のもの。以下同じ。

Hoffmann F: Die Leistung von E. L. Carl für die Entwicklung der Volkswirtschaftslehre und seine Einordnung in der wissenschaftlichen Ablauf. Weltw. Arch. Jena. 58 (1943) S. 282f.

② カアルの自然法論の基本構造は自然的秩序と人為的秩序との対立的秩序として捉えられ、前者は後者の規範・基準として規定されている。ところが、「神の予定した人間福祉の実現は往々に人間性の不完全性（貪欲・激情）のためまったく働かず妨害されている。この障碍は自然的秩序の保証者たる諸侯によって制定された人為的秩序で除去されれば、自然的秩序は再び旧に復す」と考える。

③ かれの経験対象と認識対象の区別は当時として画期的な発想であったであろう。これをリッケルトで理解するは時代的にどうかと思うが、著者もこのことにつき他の論文でアルフレッド・アモンの「理論的経済学の対象と根本概念」（第二版ウィーン、一九二七年）を利用している。

Tautscher, E. L. Carl und Adam Smith. Weltw. Arch. 54 (1941) S. 41. なおリッケルト「文化科学と自然科学」（佐竹哲雄氏訳）訳者序文をみよ。同書（大正十二年版）四四頁。

五 自然的秩序とカアルの経済理論

(イ) 経済の自然的秩序

あらゆる人間は幸福な生活を営まんとするの憧憬をもつ。幸福努力は「はてしなき大海の如く」終りなく際限がない（第一巻七頁）。人間の望むところの幸福に達すればさらにそれを乗越えんとする（三九頁）。つねにより多くを所有し幸福を無限に昂めんとする性向^①を早くから所有し、幸福追求は自然の与えた道を歩む（二〇八頁）。

凡そ人間は出生の原始状態においてどんな手段でかれの欲望を満たすかを知らずに養われ、寝むり寒さを感じず常に同じ物を欲する。人間の欲望はこの原始状態からさらに進み分化するのであり、幸福追求の範囲はあらゆる物質手段から精神的手段に拡がる（四三、七四頁）。個人は幸福の生活を送らんとする望みをもつが、それには制約がある。かれの労働力だけでは欲望のすべてを満たし得ず、他人の協力なくして幸福に到達しそれを享樂することはできないし、幸福のより高い段階に達し得ないとの認識に見覚める。

人間は食料・衣服その他の援助なしに生活し難い（五一頁）。ひとは貧困に対しまして福祉の確実な保証のためにも、その欲望満足への他人の自発的協力が必要とする（三四〇頁）。それゆゑ人間は各自の不足を改善し幸福を可能にしこれを安全に維持せんとする目的をもって社会を結合する^②。かくて福祉創造と保証のために経済社会が成立する（二六二頁）。「神は人間にかれらが野獣の如く走り廻わらざるため社会を創造された。……神は人間に人類の保存とその

増殖に就ての一般法則を与えられた。そのため神は人間にかれらが自然的必要から互に欲望を満たす外は、いかなる他の救助策も講ぜられなかった」(二〇七頁)。^③ 神が人間性に与えられたこの秩序は人間を社会において生活せしめる神慮である。

然らば自然的秩序はいかなる仕方て人間に幸福への可能性を与えたのであろうか。各人は継続的に協力して互に例外なく離れ難く結合されていると感じて(五〇頁)、自然的秩序に基づき課せられた義務を負い、すべての人がかれの欲望満足のため働いたと同じ程度で他人の欲望に貢献するという主張が成立つ(一九頁)。それゆえに個人はすべての人の福祉に貢献したと同じ程度をかれらに要求する権利をもつ。「ここにすべての人間はわれわれに為されたであろうものを、われわれが欲するだけなすべし、というわれらの創造者のモラルが示されている」(二〇五頁)。^④ 自然的秩序は福祉実現の努力のなかに私益を公益に一致せしめる(二四二頁)。

かるがゆえに、何人も自然的結合から離脱することができない。ひとは自然的秩序に唯々として従うか、或は早晩自滅するか、二者択一の無上命令の下にある。この法則にさかろうものはすべての福祉領域から転落し、貪者のなかの極貪者になり下がり、その境遇は捨子のそれと比較される、と評価するのである(四九頁)。

注

①—② この幸福追求が自利心に基づくとする主張はドイツ自然法哲学者のうち、初めてサミュエル・プーフENDORF(一六三二—一六九四)のなしたところのもの。もっともかれは「虚弱の感情」をとりあげ、「自然は各人にかれを害さんと欲する者から遠ざかざるを得ないと感じる程度の自利心と所有に強い性向を植つけた」といい、「今日人間生活の楽しみと知られるすべては人間相互の援助に起因する」とも述べ、ついに「われわれは社会なくして生活し得ないし、われわれ

種族を維持し難い。またわれわれの理性は直ちにこれを洞察し得よう」と説いている。

この思考はかれの弟子トマジウスでは、幸福はあらゆるモラルの原則まで昇華され、ハレでカアルの学習したものである。Pufendorf, Samuel. Die Gemeinschaftspflichten des Naturrechts. in: Deutsches Rechtsdenken. herausg. v. Erick Wolf. Heft 4. Frankfurt am Main. 1948. SS. 15, 18, 21.

③ 同じ表現はプーフENDORFにある。「つぎに神はこの世では人間自身が助け合い利用する以上のものはけっして何もお与えにならなかった」ibid., S. 15. なお本文のカアルの言葉はホフマンの引用によった。ibid., S. 255.

④ すでにトマジウスは「社会の福祉は個人の幸福なくして不可能であり、そして個人の幸福は公益なくば不完全である」とも説いた(ブリュンチュリー)。カアルは滯仏中ボアギューベルやヴォーパンの著作からこの種の社会連帯思想を吸収したこと指摘した通りである。Bluntschli, J. C.: Geschichte des Allgemeinen Staatsrechts und Politik. München. 1864. SS. 208. 217.

(ロ) カアルの経済理論

ここでは現在もっとも興味をひく、分業・国民福祉・価格或は貨幣および信用理論や世界経済また財政に関するこれらの諸考察を摘記したい。

(1) 分業

カアルは自然的秩序における協力は「個人が特定の地位において、すべての人の欲望のために活動する」には分業の方式で行われると説き、個人の種々雑多な欲望の満足には異なった生産者の「驚くべき多数」が必要である。(一

八頁）各種の職業はこの方法で一人の諸欲望を満たす。「人間欲望の多様性こそ異なる身分や職業を形成する」（一九頁）と論じ、まず社会的分業の起因を欲望の多様性に帰す。^①個人の欲望の満足は生産が細分し協力者が増すと同じ程度で便利となる（二一三頁）。「ひとはただ一足の靴・一本のピンを生産するために多くの人々が必要となる事実を観察する」（二七頁）。ピンのみ造る人はそれで生計を支えている。この財を買う人はその廉価なるに驚く。けだし生産は容易となり廉価で売れるからである（第二卷二三二頁）。^②

かく個人の生産が局限されればそれだけ多く他人と交換を余儀なくされるといい（二三五頁）、分業と交換の不可分性を主張する。ところが分業は後にアダム・スミスが指摘した如く、市場の広さと同工異曲の制約あることを明らかにし、「ベツヒャーの原理」をとりいれ、人口の消費能力の増減は分業の限界をなすとの見解を立てた。「人口はそれゆえに福祉の発条である」（第一卷三五頁）。人口の増加は一めん消費需要の増大・販路の拡張と分業の一そうの専門化の促進となる。他めん生産の共働者の増加、雇用の増大はそれだけ人口増加に通ず（四〇一頁）。従って人口増加は経済社会の福祉の上昇、その減少は下降となるとみ、ドイツ・カメラリズムの人口政策に基調を合せて論陣を張るのである。

注

- ① ここで比較さるべきはスミスの分業起因論であって、かれはそれを人間の交換本能に求めたが、周知の如く一九世紀に入ってドイツ歴史学派の異論を招いた。スミスのそれは分業と交換の同時性、いな交換の先在性の認識に基くものであろう。が、分業起因の歴史的事実の困難性を伴う。

② これは技術的分業のもろもろの利益による。スミスは(一)技術の改善(二)転職による時間の節約(三)機械の発明の三者をあげた。それらはカアルの文脈のうちに読むことができる。もっとも第二の利益は生産速度の増加による時間の節約にポイントがあるが。またカアルには未だ「分業」の明確な表現がない。スミスとの比較はタウツシャーの前掲論文、とくに三二頁注記をみよ。

(2) 国民福祉

経済社会における人間の協力目的は財の供給(生産)にある。全世界の財はそれだけで富や福祉となるわけでない。「財の価値・価格はその財自体に固着すると信ずる人々がある」(第一巻三六頁)。が、物は欲望の満足に役立つとき初めて財となり富となる。かく財と人間欲望との緊密な関係を指摘し、「欲望満足に役立つことなくして、物は富となり福祉に数えられない」(第二巻四六〇頁)。換言すれば、享樂のみ物を経済財たらしめ、財を個人や経済社会の富と福祉のうちに整序せしめる。

かく財性質の主観性との関連を説き、「まず第一に限界効用理念を先取し、第二にスミスを遙かに乗り越え近代経済理論に先んじている」(ロバート・ウィルブラント)。さらに価値に関して「財の人間欲望の満足にもつ意味がその財の価値を形成する」(四七頁)とみ、価値は財性質と同一の源泉から発生すると説いてもいる(三四、四七頁)。価値の本質に関連しカアル・メンガーと同じく、直接欲望に役立つ財と直接に欲望満足に役立たないが、財の生産に役立つとき価値を有する財とを区別し、財列次の構想を示す。生活維持に無条件的な満足を求められる欲望を第一列次に入れ(第一巻五九頁)、この種の欲望の満足以に充てられる財を生活必需品とし、さらに「感覚に快感を与える」欲望

を満たす便宜品を第二列次にあてる。最後に「その後の機会に備えたもので、しかも消費の時とその機会が現実に来するかどうか不確実な」余分の富（ヴォーバン）^②が加わる。この三者の関連に就て「一部の財が一人の経済人の営業から失われると、残りの財がかれらの使用に格上げされ、かくして余分の富は便宜品や必需品に、便宜品は必需品になる。またその経済人の財貨数量が増加すると、また再び財カテゴリーの移動を来たし、必需品の一部は便宜品に、またその一部は余分の富になり、かれらの財カテゴリーは下降するであろう」（二三三頁）。なお便宜品が豊富で必需品が欠乏している協力者は重要な諸財（必需品）で充されるかれの欲望満足は危くなり、それゆえにかれらの幸福のよりどころを奪われることになる。・・・またじじつ経済社会にとっては、使用に供せられる財貨数量が大である許りでなく、各人がかれの幸福のために十分な財が自由に処理しうるときは福祉の状態にある、ともいっている（第二卷二頁）。

以上要約すると、国民福祉は経済社会におけるすべての人間の労力によって調達され、かれらの使用に委ねられている必需品・便宜品および余分の富ということになる。国民福祉の概念はあらゆる分業的生産過程で働き獲得した財の総量である。再言すれば、「経済国民の富または福祉は必需品・便宜品ならびに余分の富のファンドであり、このファンドからすべての協力者の生活を維持し楽しむための必需品・便宜品ならびに余分の富が供給されることとなる」（タウッシャー）^④。当時「国民福祉の意味における富は重商主義の中心的出発概念であり到達概念であって等しくドイツ・カメリズムのそれであった。そしてフォン・ゼッケンドルフもいち早く祖国の幸福と公益に対するよき秩序と立法の創出を目指した政府の任務に就て論じた。カアルはかれの定義で、この種の政府の責任ある政策的立場を

すでに放棄し、物質的・心理的享樂を前面に押出した。かれはそれをドイツのカメラリズムからでなく、かれの滞仏中の周囲から得たのであった」(ホフマン)。

注

- ① Wilbrandt, R., Bespr.: Tautscher, Ernst Ludwig Carl (1682-1743). Schmollers Jb. Jg. 64(1940) S. 489.
- ② ドイツでは一世紀前、ヨハネス・アルトジウス(一五五七—一六三八)によって、必需品と余分の富の二つの範疇が使用されていた。余分の富とは文字通り必需品以外の財を指したようである。当時便宜品の概念はなかったであろう。しかもこの余剰品こそ輸出の大宗品であった。「商人は余分の商品を輸出し、他国から全体(国家)にとって有用である必需の商品と交換する」とある。Althusius, Johannes. Grundbegriffe der Politik. Aus "Politica methodica digesta" 1603. in.: Deutsches Rechtsdenken. Heft 3. S. 23.
- ③ 著者はスミスの類似を次の如く指摘する。「スミスが主著の序論において説いた富祉の概念の奇妙な類似性のために、かれの定義をここに文字通り引用する。『年々消費する生活上の一切の必需品と便宜品とを供給するところの本源である』。カアル自身「この富は生活を維持しかつ楽しむための必需品・便宜品および余分の富によるなにより不自由なき享樂と定義する」とあり、タウッシャーはこの福祉概念は今日の国民所得の概念を一括せる如きものとみる。
- ④

(3) 生産協同体

経済社会の生産領域で個人はすべての人々にまたすべての人は各人のために働く。各人は生産の一部を、すべての人はともにその全体を仕上げる。例えば一人の生産者は技術的に以前の生産者から半製品を受取りこれを精製品として次の生産者に渡す。あらゆる協力者の連続的な調整的存在は生産協同体の関連システムをつくりあげる。(第一卷

一八、二〇頁）それゆえ生産協同体はかく結ばれかつ相互依存の関連にある生産協力者の噛み合いであり（三五、五一頁、結局協同体は横の連繋といわるべきものであろう。ところが、それではこの協同体のすべてを表現し得ず、かような個人の協力ばかりでなく、一つの（有機的）分節的な組織であり、^①個人はただ一生産機関の協力者としてのみ協働でき、との解釈を示すに至った。^②

経済社会の構造を正しく叙述するには、人体との類推が最も効果的であるし、「政治体は人体のコピーである」と述べている（一六〇頁）。しかも各機関は人体のそれと同様に特別の機能をもつ。あらゆる機関の対応的關係が全組織を構成するのであって、経済社会の機関は農業、技工および手工業と商業である（第二卷五二頁）。

まず農業は生産協同体の最初の、最重要の機関であり、食料を提供し地中で原材料を育成し採取して他の産業部門に供給する。この種の実産協力体の機関の協力者は農民であり国民福祉協力の第一階級を形成する（五三頁）。第二の協力階級は手工業者であり、農業の生産した原素材を変形し使用可能の状態に仕立あげる。「商人は福祉の協力者の第三階級を構成する。農民によって原素材が生産されず、手工業者によって使用可能に仕上げられざるときは、ひとは商業を営むことはできないであろう」し（二九三頁）、また「農民や手工業者自身でかれらの生産物の販路を確保し、或は誰れがかれらから入手するため来るまで待つ」は困難であるし分業の原則にもどることになる（二九四頁）。商業は一の独立の機関であり、その機能は特種である。商業は農業が生産し手工業が仕上げた財を生産と消費における正しき地位にもたらしつつ、財の交換を行う（二九四頁）。従って商業の繁栄は同時に農工業も栄えることになる（二九五頁）。

これら三機関はかく相互依存の關係にあり、かれらの行為は比例的であらねばならぬし（五三頁）、しかも手工業と商業とは農業に対し正しき比例で協力しうるときのみ、かれらの労働の生産性はすべて最適まで増加し（一九八頁）、あらゆる協力者に対する福祉のマキシマムに達し得るに至ろう。

かように協力者は生産過程に参加し、最後に一定量の財を所有する結果となる（第一卷三四〇頁）。生産に対し交換から得られた財貨量は各協力者にとってその所得を形成する。この方法で生産された財貨量は再び協力者に分配されることになる。カアルの経済理論はこの経路をふんで生産・交換さらに所得分配の領域に移ることになる。

注

① 著者は「カアルのこの転換をかれの発生論的方法を離れ、目的論的方法に飛躍した。そのため、かれが完全に超克した重商主義は本質的に目的論的・有機体的方法を必要としたからである」と説いている。

しかし問題はかれをして方法転換を決せしめた理由が奈辺にあるかにかかっていよう。親しくフランス新経済論を吸収し重商主義克服に努力したにも拘らず、ドイツ・カメラリズムの陣営に復帰した事由が問わるべきであつたらう。ホフマンはドイツ自然法学が共同体理念に徹し、政治制度が諸侯と国民との相互的責任の基礎の上に組織されている点を指摘している。「カアルの代表した自然法は疑いもなくかようなドイツ的素性を示している」のである。Hoffmann, *ibid.*, 281.

② しかもカアルは当時のドイツ手工業の実態に通曉していた事実である。カアル批評に厳しいヴィルブラントさえ、かれがギルトの親方教育の改善に対し、また手工業立地に示した近代的新鮮さに富む實際的思考を高く評価しているのである。アルトジウスは手工業をふくむ職業団体の法的構造に就て次の如く述べている。「あらゆる手工業的作業は相互に結び合い緊密たらんとし、また手工業者は他の同業者の助けなくしてかれの營業を営み得ないほど、互に数多くの隸屬關係に立っていたことが証明されている。がまた、このことは手工業と農業・牧畜との關係にもあてはまる」といい、さらに手工業者はギルトの一員として一体をなし、「全体の目的と利益はすべての仲間を正しく組合に参加せしめ、かれらを個人

としてでなく、団体（身体）の構成者（分岐）として、もろもろの利益を享受せしめることが必要である。それゆえに個人は団体が負う義務に責任なく、かれが団体（組合）に負うであろう義務は何らの要求をもたない、こととなる」（傍点は引用者）

かくの如きは当時団体法下の組合員（手工業者）の権利義務を要約したものであろうが、この種の規定は中世以来のドイツ都市の産業組織の基本法の一つとなった観がある。カアルの転換はこの面からも追究する必要がある。Althusius, *ibid.*, SS. 22, 26 f. noch Wilrandt, *Bespr.* S. 491.

(4) 価格

ところで、「福祉の分配は交換において価格を通じて行われる。」価格は経済活動の軸ともいうべきものであって、生産協力者の支出がその（価格）なかに算入される（第二巻三九頁）。この価格決定の要素は生産にとり所得を形成する（第一巻一五六頁）。所得は価格において客観的生産費（第二巻三九頁）と主観的生産費（生産期間中の労働者の生計費——第一巻、二五九頁）ならびに労働労苦も補償（第二巻三九頁）として計算される。この客観的・主観的費用要素が価格を構成し、それぞれの費用要因が要求せる価格によって所得の諸要素が決定する。それゆえに初めに価格の結果として与えられたものが所得となる。価格から費用を引去った残余が所得に数えあげられよう（第一巻一五六頁）。従って所得は価格で分配され、一部は諸掛りおよび労苦補償の如き所得要素を形成し、一部は所得が「残余所得」として価格から決定されよう。

所得を巡る経済行為の斗争は価格の争いとして演ぜられるも「すべての協力者により必需品における所得が継続的

に確保される限りは、この種の価格斗争は必需品に対して行われたい」(二五一頁)と断言する。なぜなら必需品のカテゴリーでは「価格は変動を欲しない」。この価格が継続的に生産費と正しい比例を発見するために、ひとは各耕地一ヨツホ(約五〇アール)あたり支出すべき労働と諸掛りを精査しなければならぬ」(二五一頁)とし、必要品の比例価格の計算基礎を明かにしているのである。

かように価格の決定にあたっては生産諸掛りや十分なる労苦補償が維持されねばならぬ。また節度ある利子が要求されよう。

カアルは生産物の価格はすべて市場における需給の関連によって変動する、との基本的理念を確立し、供給が需要を上廻れば財は安価となり生産者の所得は低下する。逆に供給が需要を下廻ると価格があがり、工業所得は増加する。(第二卷二七一頁)。かように需給の調節は商業機能の一つであり、商人の決定する価格こそ市場需給の同時にあらゆる福祉の規制者となっている。商業の価格形成は生産消費、従って国民福祉におけるあらゆる協力者に及ぼす影響はまことに甚大であること昔も今も異ならない。適正なる商業価格の形成が要望される所以である。商業利潤やそれによる「しばしば大取引によって受取る小利潤の方が、稀れに行われそのうえ消費を絶滅する大利潤よりも(利潤幅を)増大する」価格決定の原則、いわば薄利多売の方式が適用さるべきだ、としている(三一六頁)。

(5) 貨幣

カアルの貨幣信用の論理は幾多の創見をふくみ、頗る現代的感覚に富む。まず「貨幣の機能は主に交換の促進にあ

ること、人々の一致するところである」(第一卷三八六頁、第二卷四二六頁)。

交換手段として貨幣は各財に対し受取られ、貨幣に対し各財は与えられる。貨幣は一般的交換手段として交換を形成し、貨幣によって価値を、また貨幣を通じて分業的経済の全関連が成立する。貨幣は一人より他へ渡ることによって財は生産者から消費者へ、生産者から商人、或は商人から消費者に渡る(四四一頁)。貨幣は交換において全経済を貫流し、それによって各経済活動を可能にする(四四二頁)。かように貨幣の本質は流通にある。この説明はすでにカメラリスト(ベツヒヤー)において定型化され、またボアギュベールによって新展開が行われたことをすでに述べた。貨幣流通を人体の血液のそれをもってするほど適切な比較はない。「血液は規則正しさ運動によって人体の各肢体の精髓となり活気を与え、それによって健康と英気を残す。貨幣は政治体において同じ機能を営まなければならない」(四四二頁)。この交換を可能にし、容易にする能力のなかにおいて始めてかれの経済的価値をもつ。「貨幣がこの機能を果さざれば、もはや石塊か路上の汚物を意味するにほかならず」(四四二頁)、と極言するのである。

貨幣は第二に価値の尺度として各財の価値を貨幣単位で測り、すべて生産費は貨幣単位で計算される。貨幣は価値比較財として経済プフェンニヒとなる。これによって一般的連絡財・比較点として交換手段たる貨幣が計算プフェンニヒとなり、貨幣そのものが一切の財の価値尺度・価格尺度となる。

さらに最も注目すべき貨幣機能として価値保蔵手段をあげることができる。貨幣は一切の富を代表し、各人をしてかれの富を貨幣と交換し、貨幣所有に見合う福祉を実現する財を得るからである。いい換れば、財に対する指図証券として貨幣は財を代表する(四二七頁)。「貨幣が金銀を貯蔵するはパン・肉・酒・一軒の家その他の生活用品を得る

ため行う。保蔵は金属を觀賞しその価値をつねに感触しうるだけになすのではない」(四二八頁)。保蔵された貨幣は財に対する貯蔵された請求権を意味する。

貨幣保蔵によって価値は貯蔵される。特に注目される貨幣は富そのものでなく、富を代表するだけである。貨幣による価値の貯蔵はただつねに現存の財を必要とするために行わる(四二八頁)。それゆえに、「金銀を保蔵する人々は財が存在し、生産者がつねに金銀と交換する意思あるか否かに最大の関心をいだく」(四二九頁)。財は随時交換手段たる貨幣に交換されるが、それも現存の財数量の範囲に限られる。現存せざる財を貨幣は代表しない。従って貨幣保蔵は現存の富の貯蔵に落着く。この主張は元來が重商主義貨幣論に対する批判に発したものであるが、通貨数量と財貨数量とがバランスを保つ限り貫かれよう。ところが、新たに生活必需品・便宜品の過剰が増大すれば、ひとはかれらによる貨幣をそれだけ多く獲得することになる(四二九頁)。「その間また確実に貨幣単位(ターレル)の価値が失われ、かれらに供給さるべき財は少くなろう」(四三二頁)。そのため右の均衡は破れ、貨幣価値の変動はかかる財貨数量とその価格との変動のみならず、通貨数量の変動によっても起こる。「一ターレルはつねに一ターレルでない」(四三二頁)。「例えばひとは以前一ターレル三〇ポンドのパンを受取ったが、いま僅かに二〇ポンドにすぎない。この方法でターレルの購買力は三分の一が消失した」(四三三頁)。貨幣購買力の下落はまたその騰貴を助ける。かく貨幣価値は財貨数量と通貨数量の依存のほか、なお貨幣の循環速度によっても変動する(四五六頁)。これ「貨幣が流通せず、その購買力を増加するに不足するときは貨幣は澱水の如く退く」からである(四三二頁)。

そこで供給された財貨の購買者は貨幣保蔵により減少する。少数の人のみ貨幣を有するからである。貨幣をなお使

用せんとする人はさらに財の供給の処分権を確保するために貨幣を支出しようと欲しない（四三二頁）。これは一連のデフレ的效果の発生となる。すなわち通貨数量の減少↓商業の不振↓農工業の販路の喪失↓国民福祉の減退となる（四三二、三四五、四三三頁）。カアルはこれを「貨幣数量の減少が耕地・葡萄畑や牧場の手入りを悪化し或は休耕に追いこむ原因である。同じ理由から手工業者の仕事場は荒廃し商品も閑散となる。かくて一万ターレルの不足は百万ターレルの価値ある商品を廃棄せしめるに至る、といい切ることができる」（四三七頁）と説明し、「貨幣保蔵がホンの短期間かのような風で全経済体を覆う一般的沈滞をひきおこす」（四四一頁）事態を憂慮するのである。

注

① 著者はこの問題につき当時支配的であった重商主義的見解を詳細に抗議したと述べている。ibid., S. 126 Ann 1.

(6) 信用

このテーマに就てもわれわれの興味を一そうそる所説が少くない。まず信用供与の方向をカアルは「個人企業において節約され蓄積された購売力は信用機関（銀行）に集められ、銀行から経営能力ある企業に順次貸出される（四四七頁）。この形式で信用は社会経済の生産システムに注ぎこまる。信用を通じて多数の発展能力ある商工業は購買力を導入し、それで生産設備財やその生産物を需要する可能性をもつに至る。企業は他人資本をもってそれまで、これらの購買力を何ら使用、或は収益多からざる使用に投下しない源泉から、これらの経済力を増大する能力が与えられることになる。信用によって商工業企業は拡大し拡張されることになる。これらの発展はさらに生産技術的に前

後の段階企業を招致すると説き、信用供与が技術革新につながる経済発展を予想する。信用は「銀行に預けられた貨幣は一百万の銀行基金が二百万の鑄貨同様な効果をもつ如く、いかなる場所にも行進する作用を営む」(四四七頁)。

ところで、銀行利子は信用の経済的貢献としてかように決定的でない。「銀行が確実な基礎で設立されたとき、国家に帰する実利は無限である。けれども銀行自身が諸侯にもたらすよりも、むしろ銀行が国民の富をいかに増加しうるかが問題である」(四四八頁)と問い、信用による経済の発展が何よりも国内の眠れる諸力を目覚しむことの大なる貢献を認めているのである。そこで、一例を設け、「仕事に精通せる一人の貧乏な手工業者が自立したとせよ。そのため例えば道具の買入とくに開業に一〇ターレルを必要とするが、必要資金をみいだし得ず、信用もない。止むなく旅に出て、かれの幸福を他人のなかに求めなければならぬ」(四三八頁)、その救済はただ銀行による信用にまつことになろう。^①信用によって一〇ターレルを利用し得るに至れば、かれの事業は開始され、かれの労働なくして生産し得ない国民福祉の手段が利用し得ることになる。加うるに新手工業者は材料の需要者として登場することになり、再び原料生産の完全利用か、或は拡張を経験することになろう(四四八頁)。というは銀行の許容信用が大なる、そして収益多い福祉の増大を実現する。一人の金持ちが銀行に預入した貨幣を銀行は新しい或は発展能力ある企業に配分することにより百倍の収益をあげるに至るからである。カアルはここでポアギュベールに倣い「けだし貧者の手にある一ターレルはしばしば富者の手にある百ターレルより多くを生み出す」(四四八頁)と発言する。

つぎ問題となるのは、銀行の信用授与が相当の購買力の供給となるが、その源泉は預金者の単なる購買力の移転か或は新購買力の供給(信用創造)のいずれによるのであろうか。カアルは前者は非常に無数であり、信用基礎の確守

によってなお一段と増加するだろう（四〇一頁）とみ、進んで後者、購買力創造は信用仲介の本居たる（商業）銀行の行うところであって、（当座）預金を基礎にそれを銀行資本とで、「一百万ターレルの銀行フォンドが二百ターレルの鑄貨と同ような効果」を狙って処理される。かような預入資金を基礎に銀行から貸出される信用は他の許容信用と同一の効果をもつはもちろんである。信用創造による貸出金のもつ経済的意味こそまことに甚大である。銀行は最大の収益をもたらすところに貸付しうるからである。そのみでない。銀行信用によって経済は信用を増大し、普通の経済交通によっては決して行われず、また購買力の振替によって僅かに部分的に要求しうる、睡眠生産諸力を動員し、そのうえ、生産圏に組入れることになる、と主張するのである。

ここにわれわれは一八七〇年代H・D・マクロード（一八二一—一九〇二）が銀行の資金創出の機能に注目し、今世紀の十年代ヨセフ・シュペーター（一八八三—一九五〇）が大著「経済発展の理論」（一九一二年）においてこれを大成し、さらに二十年代アルベルト・ハーンに継承された現代信用理論の萌芽が遠く二百五十年の昔、経済学の「独創的で典雅なディレクタント」（ウイルブラントのカアル人物評）と名づけられたドイツの一小国の高級官僚の手になったことは、まことに驚異というほかはない。（未完）

注

- ① この信用の社会政策的効果は後代のロードベルツウスやブルノ・ヒルデブラントの主張にもみいだす。

